海外インターンシップ		
イングランドにおける大学図書館貴重書デジタル化事業の課題		
馬場　幸栄		比較社会文化学専攻
期間	2009 年 7 月 10 日～2009 年 8 月 3 日	
場所	イングランド	
施設	リーズ大学、大英図書館、ロンドン大学	

はじめに

本インターンシップでは、いまや日本でも大学図書館が提供する重要なサービスのひとつとなりつつある貴重書デジタル化事業が内包する課題をより客観的に把握するために、国際中世会議（於リーズ大学)、大英図書館、ロンドン大学高等研究所貴重書学講座に赴き、イングランドの大学図書館貴重書デジタル化事業に伴って生じる諸問題について現地の大学関係者・図書館関係者たちと情報や意見の交換を行った。

どのように予算を獲得するか

貴重書デジタル化事業においてまず問題となるのは予算である。「景気が悪くなると大学内で真っ先に予算が削られるは人文科学系の分野です。海外からの資金援助が得られなければ、本学ビザンツ写本コレクションのデジタル化はいつまでも実現しないでしょう。」と、ロンドン大学でビザンツ史を教えているシャルロット・ルーシュ教授は現状を憂いた。

そのような状況にあるのはロンドン大学だけではない。ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ校はパーカー文庫デジタル化プロジェクト [1] の遂行に際し、米国からの全面的な資金援助に頼らざるをえなかった。結果として、デジタル化した約 550 点の貴重書を公開するサーバ本体は、ケンブリッジ大学ではなく米国スタンフォード大学に設置されることとなった。

資金提供を受けてデジタル化の成果物を外部と共有するのか、それとも、全額を自己負担してデジタル化の成果を大学が自由に利用するのか。この問題において、イングランドの大学図書館は前者を選ばざるをえない状況にあるようだ。

人材の確保

たとえ予算が獲得できても、貴重書デジタル化に必要な知識と技能を持つ専門家たちが確保できなければプロジェクトは遂行できない。先に述べたパーカー文庫デジタル化プロジェクトでは、保存修復、撮影、メタデータ（TEI[2]）、データベース、ウェブサイトのそれぞれの分野において数名ずつの専門家が必要だった。それだけの人材を学内で確保することは容易ではない。

さらに長期的な問題も存在する。せっかく専門家たちを集めても、ほとんどの貴重書デジタル化プロジェクトは数年で終了し、同時にプロジェクト・チームは解体されてしまう。「結果、貴重書デジタル化のノウハウを持ったプロフェッショナルたちの職場は確保されないし、後継者も育たない」と、ケンブリッジ大学で古書体学を教えるピーター・ストークス博士は語った。

貴重書の劣化を早めるのではないかという懸念

貴重書デジタル化のプロジェクト・チームには保存修復の専門的知識を持つスタッフが不可欠だが、そうした専門家のなかにはデジタル化が貴重書の劣化を加速させる原因となるのでは、と不安に感じている人もじつは少なくない。たとえば大英図書館の保存修復師アン＝マリー・ミラーは、デジタル化された情報によって人々が貴重書のことを知る機会が増えると、「貴重書それ自体を直接に閲覧したいと考える人の数が増加し、ひいては貴重書の劣化を早めるのではないか」という懸念を抱いている。

この疑問に対して、貴重書の公開と保存という双方の役割を担う大学図書館は十分な議論と検証をもって応えるべきだろう。そもそも、貴重書の劣化を早める主な要因は、単純な閲覧者数ではなく、閲覧・展示・撮影にかかる累積時間や出納回数ではないのか。デジタル複製という代替物の登場によって、ひとりあたりの現物閲覧時間は従来よりも短くなっているのではないか。検討されるべき事柄は多い。貴重書のデジタル化が保存の理念に反さないものであることをスタッフや利用者に納得してもらうこともまた、大学図書館にとって大事な課題のひとつと言えるだろう。

サービスの有料化に関する議論

さて、デジタル撮影の成果をいざオンライン公開しようとすると、大学図書館はそのサービスを有料にするか無料にするかという決断を迫られることになる。ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ校のクリストファー・ド・ハメル博士は「すべての画像は無料で閲覧・ダウンロードできるようになるべきだと私は信じています」と主張しているが、いっぽうで同校のナイジェル・モーガン博士は「撮影が終わり、公開の準備が整っても、今後ずっと維持費が必要となることを忘れないでください」と述べ、サービスの一部は有料化せざるをえないとの見解を示した。

結局、ド・ハメル、モーガン両博士が参加しているパーカー文庫デジタル化プロジェクトのオンライン閲覧検索システムは、基本的検索機能と低解像度画像の閲覧だけを無料とし、高度検索機能と高解像度画像閲覧は有料とすることが決まった。しかし、その料金が非常に高額なため(契約料 9,500 米ドル、2 年目以降更新料 480 米ドル）海外の研究機関や図書館からはすでに批判の声が上がっている。

まとめ

貴重書のデジタル化はイングランドでも重要な大学図書館サービスのひとつとして認識されている。だが、貴重書デジタル化プロジェクトを実施するためには外国資本を頼りにせざるをえないし、デジタル化に必要な専門家たちを大学が常勤として雇ったり育成したりする環境も整っていないのが現状である。また、デジタル化は貴重書の保存にとって不利に働くのではないかという懸念の声がいまだに一部から聞かれ、オンライン公開については有料とするべきか無料とするべきかで意見が分かれている。

これらの問題は、既に貴重書デジタル化事業を行っている、あるいは、これから着手しようという日本の大学図書館にとってもけっして他人事ではない。イングランドの事例を参考として、日本の大学図書館でも貴重書デジタル化事業が今後いっそう良い形で実施されることを期待したい。

註

1. 正式名称は Parker Library on the web。2009 年 10 月から本格的に公開される。
http://parkerweb.stanford.edu/parker/actions/page.do?forward=home
2. Text Encoding Initiative の略。書誌情報などデジタル化されたテキストをマークアップするためのタグ・サブセットの一種。

ばば　ゆきえ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

馬場さんは、慶應義塾大学文学部高宮利行教授を中心とした HUMI プロジェクトという大学所蔵貴重書のデジタルデータ化プロジェクトにかかわった経験を持っています。本学大学院ではその経験を生かしつつ、現代までつたわっている貴重書のなかでも中世後期のシトー会を中心として作製された写本とその文化について博士論文を執筆中です。馬場さんの関心は、西洋中世文献学・古文書学・アーカイヴ学と、それら史料を使った西洋中世史研究とを融合させて成果を生み出すことにあると思われます。今回の海外インターンシップは、貴重書デジタル化事業につき日本より一歩先んじている感のあるイギリスの実情を、現場に参加しそれらの事業に直接関わっている研究者とのやりとりを通じて、既に明らかとなっている問題点を学びとりその成果を日本で活かそうという試みでした。その意味で本インターンシップは、馬場さんの博士論文における大きな柱の一つに寄与するところが大きかったと思われます。今回、現場での貴重な経験を得るとともに、事業に携わる研究者との直の交流ができたことは大きな財産となることと思われます。日本でも今後はこのような貴重な経験を持つ人材を必要とする場が見つからんことを心から願っています。

（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　准教授　新井 由紀夫）